

佛 教 研 究

第 八 卷 第 三 號

昭 和 二 年 七 月 發 行

目 次

帝釋・阿修羅の研究

伊藤仁齋と載東原(承前)

西山家に於ける聖淨二門並に釋迦彌陀二教論を究めて眞宗の二門二教論に及ぶ(一)
支那般若翻經史稿

京城の經學院を見る

西藏大藏經目錄(六)

新刊紹介

學界總覽(其二)

學會彙報

山 邊 習 學

青 木 晦 藏

上 杉 慧 岳

美 濃 晃 順

浦 川 源 吾

櫻 部 文 鏡

佛敎研究會々則

- 第一條 本會ヲ佛敎研究會ト稱シ、事務所ヲ大谷大學内ニ置ク。
- 第二條 本會ハ佛敎、哲學、及ビ人文ニ關スル諸般ノ研究ヲナスヲ以テ目的トス。
- 第三條 本會ノ會員ハ大谷大學敎職員、學生、及ビ本會ノ主旨ニ賛同スルモノヲ以テ組織ス。
- 第四條 本會ハ左ノ事業ヲ行フ。
 一、隔月一回講演會ヲ開ク。
 二、毎年一回大會ヲ開ク。
 三、年四回雜誌「佛敎研究」ヲ發行シ、之ヲ會員ニ頒ツ。
 四、隨時圖書ヲ出版ス。
- 第五條 本會ニ左ノ職員ヲ置ク。
 一、會長 一名
 二、理事 一名
 三、評議員 若干名
 四、委員 若干名
- 第六條 會長ハ本會ヲ代表シ、評議員會ヲ總理ス。
- 第七條 理事ハ會長ヲ補佐ス。
- 第八條 會員ハ雜誌「佛敎研究」ノ配布ヲウケ、隔月講演會並ニ大會ニ出席スルコトヲ得。
- 第九條 會員ハ會費トシテ年額金參圓ヲ納ムベキモノトス。
- 第十條 本則ハ評議員會ノ決議ニ依ルニアラザレバ變更スル事ヲ得ズ。

以上

佛敎研究會職員

會長	村上專精
理事	藤岡了淳
評議員 (五十音順)	
阿部	現亮 泉 芳環
鈴木	弘 名畑 應順 浦川 源吾
橋川	正 林 日下 無倫
林	五邦
庶務擔當	泉 芳環
同	鈴木 弘
編纂擔當	日下 無倫
編纂擔當	林 五邦
會計擔當	名畑 應順
會計擔當	佐々木 秀英
編纂委員	稻葉 秀賢
同	高西 賢正
同	武生 讓
同	日暮 京雄

口繪に就いて

本圖は近江來迎寺に傳へられた六道圖十五幅中の一部分である。惠心僧都、又は巨勢弘高の筆等と稱せられるが、多分鎌倉時代のものであらうとは、其畫風から鑑賞家の推測する所である。圖は『阿修羅道常戰闘圖』中の上方の一部である。向つて右、白象に乗る王者は云ふまでもなく帝釋で、左方の中空に奮躍してゐる三面四臂の怪人は大阿修羅王である。阿王の一臂が日(或は月)に觸れてゐるのは、羅睺阿修羅の傳説を意味するのであらう。帝釋の軍衆威風堂々たるに對し、阿修羅衆は醜怪瘳猛の相をつけてゐる所、象鼻が一阿修羅を捲き上げてゐる所、劔戟、大石等が落下して、阿軍の潰奔する所等、皆一々經典に據つてゐる。黒雲渦捲く大虚空に演ぜられる神祕的の大戦闘を描き出して上乘なるものであらう。(「帝釋・阿修羅の研究」終の部分参照)

図版Web非公開

編輯後記

□本號は印刷も捗つて、七月の始めには讀者諸氏にお渡しするものが出来るのを喜ばしく存じます。遅刊のお詫びなど不體裁なことは本號を以て打ち切りといたします。

□編輯委員の半数交迭期となり、高西兄卒業論文でお忙しいのと武生兄は就職せられ多忙のためとで辭任、多尾兄と花山兄とが後任に定まりました。兩兄とも編輯に就いては友人、斬新な編輯振りを以て讀者諸氏と相見ゆることゝなりました。

□興宗大谷大學が大谷大學になり、尋源會が學友會になり、又「無盡燈」が「佛敎研究」となり、更に「大谷大學云々」と名稱が變ることとなるらしい。名の持つ意味の外延が大きくなるにつれ、内包が小さくなるといふ批評や批難をうけてゐる様であるが、それ等の懸念は一掃され、大谷大學の現在及び將來への歩みが総合的に發表され、學界に過去に占めた以上の地位を獲得することゝならう。

□これより夏期休暇となる、讀者諸氏の健在を念じて筆を擱く。

(日暮)

佛敎研究

年四回 一四
七月發行

會費年額金參圓

一部賣代金ハ隨宜申シ受ク

廣告料

一頁 金拾五圓、半頁 金拾圓

佛敎研究第八卷第一號

昭和二年六月廿五日印刷
昭和二年七月一日發行

不 許 不
禁 轉 製
載

編輯兼 佛 敎 研 究 會
發行者

右代表者 藤 岡 了 淳

印刷者 藤 澤 淨 圓
京都市壬生川通五條下ル

印刷所 大谷大學佛敎研究會
京都市烏丸通今出川上ル西入

出版部

發行所

京都市烏丸頭大谷大學内
振替穴阪四四九九七番

佛敎研究會